



スサノオも鎧を脱ぎ捨てる。

脱ぎ捨てた鎧は大地にめり込む。相当な重量の鎧であることが想像できる。

と同時にスサノオの筋肉は肥大化し、血管が浮き出す。

髪の毛は逆立ち、鬼のような形相が更に鬼のような形相となる。

そして、神炎のオーラが解放される。

スサノオ

「迦楼羅炎(かるらえん)・・・解放！」

「ついでに私のベルーフ(天職)も教えてやろう」

蓮也

「ほう」

スサノオ

「私のベルーフはブレイカー(破壊者)だ」

その力の扱いを間違えると世界が消滅する可能性があるため、神代に封印されしベルーフ(天職)がいくつか存在する。その封印されしベルーフの一つがブレイカー(破壊者)である。ブレイカーは、神の代理として、破壊の力を司るとされる。

スサノオ

「神の代理者として、今、お前を破壊する」

蓮也

「その理由は？」

スサノオ

「我が破壊すると決めたら、それ以上の理由はいらぬ」

「なぜなら、我が神の代理者だからだ」

蓮也

「ならば、神の意志がどうであるか、ここで教えてやろう」

スサノオのオーラは益々燃え上がり、その灼熱のオーラは両陣営からも感じ取れた。

スクナ

「スサノオ様も本気を出したでスクナ」

ナムチ

「神炎の熱気がこちらまで届く程に熱い・・・」

スサノオが腕に神熱を集中すると剣が真っ赤に燃えだす。物理魔法である。通常の魔法は精神エネルギーを使うが、物理魔法は身体が極限まで鍛錬された者が使うことが可能とされる。増血系が脊髄増血から全身増血に変化し、血液は腕の筋肉に集中し、筋肉は肥大化する。そこから生まれる神熱が剣へと伝わる。

それは、通常の剣なら溶解する程の熱であるが、スサノオの持つ草薙の剣は、それによく耐えた。

そして、その真っ赤に燃えた剣を振り下ろす。

蓮也もオーラを解放して剣を繰り出す。



十文字に切り結んだ剣の衝撃波は、これまでにない強さであった。そのお互いの繰り出す斬撃の衝撃波によって大地が揺れ、そして割れた。その衝撃波はもちろん両陣営の兵士たちにも届く。

そして、城壁の上でその様子を見ている舞也にも伝わる程であった。

舞也

（あのロータジアの剣を蓮也は使いこなしている。彼こそ、初代蓮也王の再来であろう。天に在します先王よ、見ておられますか。貴方のチカラは蓮也が継承しましたよ）

一旦、両者が離れ、剣を構え睨み合いとなる。

両者のオーラは益々燃え上がる。

スサノオ

「我が力を見せてやろう」

「素戔鳴流奥義・爆風波！」

スサノオの腕の筋肉が肥大する。そして、素早く草薙の剣を水平に薙ぎ払う。轟音を立てて爆風の波が蓮也に襲いかかる。それを蓮也がギリギリでかわそうとする。しかし、衝撃波の範囲が思ったよりも大きい。致命傷には至らないが、蓮也の身体は削られ、その部分からは出血する。

スサノオは更に衝撃波を繰り出し、蓮也はそれを避ける。更に蓮也は身体を削られ、流血していく。しかし、それでも蓮也は顔色一つ変えない。

蓮也

「インテグリストが神のオーラを纏った時、真のインテグリストとなる」

蓮也はプロテクションを張り、スサノオの攻撃を防ぎつつ、精神集中状態に入る。魔法充電は、その魔法が強力である程時間を必要とする。プロテクションの中で、精神エネルギーが充満し、やがて解放される。神のオーラは更に燃え上がり、神々しさを増した。

蓮也

「燃え盛れ、炎よ」

「研ぎ澄ませ、風よ」

「剣技統合！」

「伊耶那岐神伝流奥義・鳳凰疾風波！」

インテグリストが封印ベルーフとなる理由は、様々な力を統合し、その威力が乗数倍されるからである。今、蓮也は自身の持つ、火魔法・風魔法・潜在運動系・剣技を統合したのである。

蓮也は水平に剣を薙ぎ払う。

すると、火炎を帯びた疾風の衝撃波が剣から解き放たれる。

火炎を帯びた衝撃波は、スサノオが放った衝撃波を破壊し、スサノオ目掛けて襲いかかる。スサノオは剣でその衝撃波を真っ二つに一刀両断する。衝撃波は左右に分かれ、後方の大地を抉り、抉られた大地は熱と煙が立ち込める。



スサノオ

「なるほど、このスサノオにお主の覇気は伝わった」

「ならば、こちらもそれに答えよう」

スサノオの腕の筋肉が更に肥大化し、血管が浮き出る。その腕は赤々と高熱を発し、それが剣に伝わる。それを見て、蓮也も力を溜め、次の攻撃に備える。

スサノオの真っ赤に燃えた豪腕で草薙の剣を奮う。

スサノオ

「風・炎・力・混合！」

「業火爆風波！」

スサノオの力、そして爆風と業火が混合され、その真っ赤に燃える衝撃波が爆音とともに進む。

そして蓮也も応戦する。

蓮也

「鳳凰疾風波！」

両者の放った衝撃波は、ちょうど、両者の中央を衝突し、爆発を起こす。

爆風が収まると、地面は大きくえぐられていた。

その衝撃波に吹き飛ばされないよう、兵士たちは剣を地面に立て、身をかがめていた。

一方、スサノオはその場で仁王立ちしている。そして、蓮也に語りかける。

スサノオ

「蓮国の王子よ、お主はなぜ戦う？」

蓮也

「そのようなことを聞いてどうする」

スサノオ

「よいから、答えよ」

蓮也

「・・・そうだな」

「理想の世界を創造するためだ」

スサノオ

「理想の世界だと？」

「なるほど、よい答えだ」

そう言うとスサノオが斬りかかる。

蓮也もそれに応戦する。

そして、両者の戦いは続く。

その凄まじい攻防戦を観るために、両陣営の兵たちは身を乗り出して来ている。

蓮也が押せば、ロータジア軍から歓声が上がり、スサノオが押せばスサノオ軍から歓声が上がる。そして両軍の兵士の一部が接触し出し、勝手に戦いを始めた。

興奮した兵たちは敵味方入り混じり、乱戦と化していく。



その時、遠くの方から軍が現れた。両軍から響めきの声上がる。
反乱鎮圧を終えた神速の弓騎兵部隊・アルタイル隊が帰還したのである。
アルトドール軍から目付役（監視役）である参謀ムングは、アルタイルの想定外の早い帰還に驚いた。

ムング

（アルタイル將軍の用兵は神速と聞いてはいたが、これほど早いとは。これではこちらの計画が・・・）

傍観していた軍師ナムチがスサノオに近寄り声をかける。

ナムチ

「そろそろ・・・」

スサノオ

「わかっておる」

「蓮国の王子よ、見事な腕前であった。この乱世にて、お互い生あらば、再び雌雄を決しようぞ」

スサノオは最後に渾身の神気を解放し、蓮也を数メートル程吹き飛ばす。

そして、スサノオは馬に跨り踵を返す。

しばらくするとスサノオ軍は撤退していく。

反乱平定軍の隊長・アルタイルが蓮也の下に向かう。

アルタイル

「遅れて申し訳ございません、蓮也様」

蓮也

「アルタイル將軍、反乱平定、ご苦労であった」

アルタイル

「ありがたきお言葉」

「ところで、追撃はされぬのですか？」

蓮也

「そうだな、スサノオには借りができた、背後を襲うのはやめておこう」

「まあ、あちらも借りを返した、と思っているかもしれぬがな」

アルタイル

「借り・・・でございますか？しかも、お互いにでございますか？」

蓮也

「まあな」

アルタイル


「剣を交える場で、どのようなやりとりがあったかはわかりませぬが、あのスサノオ相手にご無事で何よりです」

蓮也

「そうだな、恐ろしい相手ではあった」

「それは、まあよい。貴殿も疲れたであろう。城で待機せよ。すぐにデネブ將軍も戻ってくる。そこから、もう一度、部隊編成し、砦に兵を配置する」

アルタイル



「かしこまりました！」

蓮也にすり寄るものがいた。愛馬、ユニコーンのケントニスだ。それを見て蓮也は安堵の表情を見せた。

ケントニスは脳震盪を起こしていただけであり、命に別状はなかった。ヒーラーに軽いヒーリングを施されるとケントニスは元気を取り戻し、蓮也を乗せて何事もなく城内へと歩を進めた。

一方、スサノオ陣営では。

ナムチ

「多少の手加減はあったかと存じますが、楽しみな若者が現れましたな」

スサノオ

「あれは手加減とは言わぬ、試してやったのだ」

「あの者を倒す時は、あの者がそのチカラを自己のものとした時だ。でないと、フェアでないし、面白くないであろう」

ナムチ

「しかし、クエストの報酬はよかったですか？」

スサノオ

「世の中には金よりも大事なものがある、それだけだ」

ナムチ

「大分、変わっておられますな」

スサノオ

「ナムチよ、これが普通であるべきだ」

ナムチ

（アナタは変わっておられる、だから私は貴方についていくのです・・・）

蓮也とスサノオの神闘気がぶつかり合い、剣を交えることで、以心伝心による男同士の会話が成立していたようである。スサノオの剣を通して“もっと高みに登って来い”と言っているように感じた。そして、最後に感じたスサノオのオーラが、その頂（いただき）を示しているようであった。それを蓮也は肌で感じた。

スサノオの方は、途中から戦略的には不利になりつつあることを感じていた。しかし、その状況で蓮也が一騎討ちを受け入れたことに心意気を感じていた。

結局、スサノオは北西部の領地を取らずに帰還した。

アルトドール帝国とスサノオの契約は、北部の領地を奪取した場合、クエスト料金全額の支払い、そうでない場合はその半分と、兵士の動員数及び負傷の補償金を支払うという内容となっていた。アルトドール王はロータジア軍にそれなりの打撃を与えたため、そこそこ満足していた。しかし、攻略目的であるロータジア北西部の鉾山の奪取は出来なかった。こうした「黄金を巡る戦い」、「第一次黄金戦争」は一応、幕を閉じるのであるが、この戦いにより蓮也は覚醒し、伝説の傭兵・スサノオと互角に戦った者として、初めてその名が各国に轟くこととなる。